第三学年　　道徳学習指導案

日時　：　平成１５年１１月１１日（火）５校時
学級：3年3組（男子17名 女子17名 計34名）
授業者：皆方　敦

１．主題名　　弱さの克服

２．資料名　　足袋の季節（明日をひらく３年･東京書籍）

３．内容項目　　人間の弱さの克服　視点３－（３）

４．主題設定の理由

（１）価値について
人は時として人間の持つ弱さから誘惑に負け、過ちを犯したり失敗をしたりすることがある。こうした時、その弱さを素直に認め、克服に努めて、人間らしい温かい心を育てていくことが大切である。それには、他人の助言や忠告を素直に受け入れ、自分の成長に役立てていこうとする姿勢も必要である。さまざまな人間関係の中で、生徒はひとりよがりになったり、相手を疑ったり、ごまかしたりしがちである。しかし、謙虚に自己を省みて、悩んだり苦しんだりする姿も一方では見られる。また、他人の過ちや失敗に対しても寛容である側面も持っている。そこで、自分自身をしっかり見つめて、自分の過ちを素直に認め、他人から学んだものを自己の反省に生かし、より人間らしく生きようとすることの大切さを深くとらえさせたいと願い、本時の主題を設定した。

（２）生徒について
明るく素直な生徒が多く、さまざまな活動で協力し合うことができる。特に中学校生活最後の文化祭では、合唱コンクールの取り組みなどを中心にクラスの団結が強まった。また、１人１人が進路決定に向けて自分を見つめ、自分を向上させようと努力している。しかしその一方で、自分の弱さに負け、悩んでいるだけでよりよく行動することができない生徒もいる。思うように自分を表現できず、うまく人間関係を作れない生徒や自分勝手な行動をする生徒も見られる。この資料を通して、人間の弱さ、醜さに気づかせるとともに、それを克服する強さも同時に合わせ持っていることに気づかせたい。そして今後の生活につなげさせていきたい。

（３）資料について
今から４０年前、貧しい暮らしをしていた主人公は、ある日上役の言いつけで行商のおばあさんのところにもちを買いに行く。そして、悪いと知りながら足袋がほしいという気持ちに負け、お釣りを多くもらってしまう。あの貧しいおばあさんから金をかすめ取ったという自責の念と、励ましてくれたのだという甘い考えが主人公の胸を苦しめ続ける。その後初めて月給をもらうと、急いでおばあさんを訪ねるが、すでにおばあさんは死んでいた。後悔の中でおばあさんがくれた心を今度は誰かに差し上げなければならないと決心する主人公であった。
つり銭をごまかした主人公に焦点を当て、話し合いを構成する中で、主人公の持つ弱さと気高さに気づかせ、本時の価値に迫りたい。

5．本時の展開

（1）ねらい

人間の中にある弱さや醜さを理解し、それを克服する強さや気高さのあることを自覚し、人間としての誇りを持って生きようとする前向きな態度を育てる。

（2）展開

段階	教師の働きかけ	期待する生徒の反応	指導上の留意点・評価
導入 5分	○資料を読み、主人公の状況をつかませる。		●北海道の冬の厳しさは花巻と比べものにならないことを押さえさせる。 ＊紙板書 貧しかった 雪の中を素足で ↓ なんとかして 足袋を買いたい
展開 40分	1．おばあさんに「五十銭玉だったね。」と言われたとき、どんなことを考えたか。	・「しめた。」という気持ち ・これで足袋が買える ・ごまかすのはよくない ・ばれたら怖い	○厳しい状況に置かれた者が欲望に負けてしまう人間の弱さに共感させることができたか。 ＊お婆さんの絵 ＊紙板書 五十銭玉だったね
	2．つり銭をごまかした主人公をどう思うか。	◎「しかたない」 ・寒くて凍えそうなときだから ・お婆さんが「踏ん張りなさいよ」と言っているので ◎「よくない」 ・どんなときでも盗むのはだめ ・お婆さんも貧しいので	●「貧乏」「ゴム長どころか足袋を買う余裕もない」「雪の中をぴょんぴょん、素足で」の状況を押さえたうえで考えさせる。
	3．汽車に乗ってお婆さんに会いに行くとき、主人公はどんなことを考えていたのか。	・立派になった自分を見てほしい ・お礼が言いたい ・あやまりたい ・心の中のもやもやを晴らしたい	●人間としての葛藤のなかで正しい生き方を指向していった姿に気づかせる。
	4．「泣けて泣けてしょうがなかった。」とき、主人公はどんなことを考えていたのか。	・もうおばあさんにわびることができない ・正直に金を返さなかった自分の弱い心に腹が立った	○深く後悔している主人公の心の苦しみをとらえさせることができたか。 ＊紙板書
	5．その後、主人公がくじけずにやり通せたのは、なぜだと思うか。	・自分の過ちを忘れることなく、深く反省し、いつかは償いをしようとしたからではないか。 ・自分の人生の失敗を、それからの生き方につなげ、おばあさんがくれた心をだれかにさしあげようと考えていたからではないか	●学習シートに書かせる ○自分の心にある弱さを理解し、弱さを克服しようとする主人公の人間らすでに死んでいたしい強さを持って生きることの大切さを感じ取らせることができたか。
終末 5分	6．本時のまとめ	＊人間の心の弱さと、それを克服していこうとする気高さにふれる。	●教師の感想を付け加える。

30 足袋の季節

足袋をはく冬が来ると、必ずわたしの心の中に生き生きと映し出されてくるおばあさんがある。

今から四十年前、小学校を出るとすぐ、小樽のおばをたよって父母のもとをはなれたのだが、当時わたしの父は日雇い人夫で、その仕事もたまにしかなく、家は非常に貧しかった。

はじめて会ったおばだが、「なんで来た」といった冷たい顔をしながらも、それでもわたしを小樽郵便局の給仕に世話をしてくれた。

月給が十四円で、食費としておばが十三円五十銭を取り、残り五十銭の中で頭をかり、ふろ銭に当てなければならないので、それこそ、冬が来てもゴム長どころか足袋を買う余裕もなかった。

雪の中を素足でぴょんぴょんはねるようにして局へ通ったもので、夜勤を終えて帰るときの足の冷たさには、何度泣かされたかわからない。なんとかして足袋を買いたい……、いつも、そのことでいっぱいだった。

郵便局の構内に、毎週月水金だけ、だいふくもちを売りに来るおばあさんがいた。そのおばあさんは、自転車置き場の横に、箱を並べ、いつも寒そうに首巻きで肩を包み、ふきっさらしのからすのように小さくちぢこまっていた。

ある日、上役の言いつけで、十銭玉をにぎってもちを買いに行った。おばあさんは、だいふくもちを五つふくろに入れて、わたしにわたしながら、「五十銭玉だったね。」ときいた。自分がわたしたのは十銭玉だったが、そのとき、四十銭あったら足袋が買える、という考えがいなずまのように頭にひらめいて、思わず、「うん。」とうなずいてしまった。

おばあさんは、ちらっとわたしを見た。そして、「ふんばりなさいよ。」と、ぼそっとひとこと言って、わたしの手に十銭玉を四つにぎらせてくれた。

わたしはにげるようにしてその場を去ったのだが、あのおばあさんは、わたしがごまかしたのを知っているのだと思うと、いてもたってもいられなかった。その金を返そうと心の中では思うのだが、「四十銭あったら、足袋が買える」という心に負けて、とうとうそれが果たせなかった。

それからは、おばあさんの前に立つことはできず、もちを買いにやらせられるときは、必ず同僚にたのんで、行ってもらった。

あの貧しいおばあさんから金をかすめ取ったという自責の念と、「ふんばりなさいよ」と言ってくれたのは、わたしに「これで足袋を買ってがんばりなさいよ」とはげましてくれたのだというあまい考えとが、日夜、小さなわたしの胸を苦しめた。

逓信講習所（試験に合格して、そこを終えると、札幌郵便局に配属された。はじめて月給をもらうと、汽車に飛び乗るようにして、果物かごを手に、そのおばあさんを小樽局に訪ねた。

すでにおばあさんは死んでいた。

局の近くを流れる色内川の橋にもたれて、ただむしょうに自分に腹が立ってしようがなかった。

持っていた果物かごを川に落としてやった。うきつしずみつ流れていくかごを見て、わたしは、泣けて泣けて、どうしようもなかった。

死というものが、こんなに絶対なものかということが、あのときぐらい強く感じられたことはない。

以後、わたしは、土方から砂利取り人夫、にしん場の漁師と、二十何種類の職を転々としたが、なんとか今日までくじけずにやりとおせたのは、あのおばあさんのちらっとわたしを見たあのときの目、「ふんばりなさいよ」と言ってくれたあの言葉によって、支えられてきたからだと思う。

今となっては、ただ後悔の念を深くするばかりだ。いや、あのおばあさんがわたしにくれた心を、今度はだれかに差し上げなければならないと思っている。

（中江良夫作「足袋の季節」による）